低下が認められた.

BADS（遂行機能障害症候群の行動評価）：正常下限の成績

RBANS：言語性の遅延再生の著しい障害が認められた.

【考察】病歴や検査所見より本症例は左前頭葉を中心とした損傷により遅延再生に限定した記憶障害，実行機能障害及び情動制御の障害を呈したと考えられる．職場等での著しい機能低下にも関わらず，WAIS-R，HDS-Rでは機能低下を反映する所見はまったく得られなかった．またより実生活に近いとされるBADS等の検査においても障害を十分に反映しているとは言い難く，前頭葉損傷の症状把握の困難さを示す症例であった.

3　Quetiapineにより陽性・陰性両症状と薬剤性高PRL血症が改善した統合失調症の1例

熊田　智・阿部　亮・高田理恵子
細木　俊宏・染矢　俊幸*
新潟大学医歯学総合病院精神科
新潟大学大学院医歯学総合研究科
精神医学分野*

統合失調症の治療には抗精神病薬が用いられるが，特に初回エピソードにおいては非定型抗精神病薬が第一選択薬として位置づけられている．現在，非定型抗精神病薬の中で日本において使用できるものにはrisperidone，perospirone，quetiapine，olanzapineがあり，従来の定型抗精神病薬に比べてD2レセプターに対する親和性は低く，5-HT2レセプターに高い親和性を示す．そのため陽性症状のみでなく陰性症状にも高い効果を示すと言われている．その中でもquetiapineは他の非定型抗精神病薬に比較しても，D2レセプターへの親和性が低いため錐体外路症状が出現しにくく，血中PRL濃度を上昇させないという特徴があると報告されている．今回，我々はrisperidone投与では陽性・陰性症状の改善が十分でなく，薬剤性の高PRL血症を呈した統合失調症の患者に対し，quetiapineへの置換が有用であった症例を報告する.

本症例は18歳の女性で，入院当初は体感幻覚のため食事が摂れず解体症状も著明であった．また意欲の低下，感情の平板化，思考の貧困化などの陰性症状も認められた．まずrisperidone（Max 6 mg/日）により治療を開始したが，症状の改善がほとんどみられず，薬剤性の高PRL血症（142ng/ml）を認めた．そのためquetiapine（Max 300mg/日）への置換を行なったところ，体感幻覚が消失し食事を取れるようになり，また解体症状も改善した．陰性症状も次第に改善を認め，他患との交流を認められるようになり活動性が高まった．血中PRL濃度も正常値まで低下し，他の副作用が出現することもなかった．その後も状態は安定しており，積極的に外泊を繰り返すようになり，退院となった.

4　顕著な陰性症状にペロスピロンが有効であった統合失調症の1例

横山　裕一・阿部　美紀・江川　純
染矢　俊幸*
新潟大学医歯学総合病院精神科
新潟大学大学院医歯学総合研究科
精神医学分野*

PerospironeとrisperidoneはD2受容体遮断作用に加えてセロトニン（5-HT2）受容体遮断作用を併せ持つserotonin-dopamine antagonist（SDA）として分類される新規の抗精神病薬であり，統合失調症の陽性症状のみならず，陰性症状にも有効性が高いとされている．また，haloperidolのような従来の抗精神病薬と比較して，錐体外路系副作用が少ないという特徴を持っている.

今回我々はrisperidone投与中に陰性症状の悪化をきたし，perospironeへの置換がその改善に有効であった統合失調症の1症例を経験したので，BPRSの陰性症状の項目の評価をふまえ，若干の考察を加えて報告する.

症例は43歳の女性．X-23年（20歳時）に発症しhaloperidolやchlorpromazineなどの薬物療法によりほぼ寛解状態に至り，文章校正の仕事に

就き，独り暮らしをしていた．X-13年11月に抑うつ気分，意欲低下が出現し，近医精神科にて抗うつ薬を処方されたが症状は改善しなかった．その後約10年間は，うつ病としてamoxapine, sulpirideなどで治療を受けていた．X-2年1月に被害・関係妄想，注察妄想が再燃しrisperidone（Max 6 mg/日）を投与された．陽性症状は速やかに消失したが，同年9月からは実家に戻り自閉的な生活を送るようになった．X年7月から意欲低下，不安感が強まり，希死念慮が出現したためperospironeへの置換を開始し，薬剤調整目的にて10月に当科入院した．入院時perospirone 36 mg/日から開始し，11月に48mg/日まで増量したところ，意欲，不安感，周囲への無関心さなどの陰性症状が著名に改善し，退院後は作業所へ通うまで社会性が回復した．

5 Risperidoneにより妄想とこだわり行動が改善した高機能自閉症の1例

江川　純・阿部　美紀・横山　裕一
染矢　俊幸*
新潟大学医歯学総合病院精神科
新潟大学大学院医歯学総合研究科
精神医学分野*

自閉性障害は有病率が0.05～0.1％で，男女比は4～5：1と男性に多い．病因としては遺伝性の関与が強いと考えられており，一卵性双生児での自閉症一致率は60～80％であり，二卵性双生児での0～10%に比較して高値である．

症状は，①対人関係における質的な障害，②意思伝達の質的な障害，③行動，興味の限定された反復的，常同的な様式，の3つが挙げられる．治療としてはTEACCHに代表される構造化された療育プログラムなどの心理社会的治療や抗精神病薬やSSRIなどの薬物療法が試みられ，研究が進んでいる．

今回，我々は幻覚妄想を合併した高機能自閉症の症例にrisperidoneを使用した経験をしたので，若干の検討を加えて報告する．

症例は34歳男性，31歳頃より「元職場の女性と結婚する」「仕事がうまくいかないのは盗聴されているから」など幻聴妄想が出現した．次第に幻聴妄想に影響された行動化が著明となり，当科に入院となった．

これまで自閉症に体系だった妄想を合併した報告はほとんどない．自閉症には言語障害を伴い，70％以上に精神遅滞を合併するため，稚拙な表現，思考内容から体系だった妄想まで至らないためと思われる．一方，高機能自閉症では周囲の些細な言動に過敏に反応し非現実的な思考内容や一時的なファンタジーを生じることがあるとの報告がある．本症例では，非現実的な願望充足的な奇異な思考を長期に訴え行動化を認めたため，それを妄想と捉え治療した．

幻聴妄想に対しrisperidoneを使用したところ，幻聴妄想の内容に変化はなかったものの行動化を抑えることが出来た．同時に自閉症のこだわり行動や対人交流にも改善がみられた．自閉症の社会性やこだわり行動などの中核症状にに対する薬物療法の報告は少ない．しかし，本症例のように症状の軽減を示す例もあるため，積極的に薬物治療を試みる価値があると考えられる．

6 精神科受診歴の有無による自殺者の特徴

阿部　亮・塩入　俊樹*・西村　明儒**
染矢　俊幸*
新潟大学医歯学総合病院精神科
新潟大学大学院医歯学総合研究科
精神医学分野*
横浜市立大学医学部法医学教室**

自殺者の80～100％が何らかの精神疾患を有しているとされているが（Moscicki, 1997他），自殺者の生前における精神科受診率は，20～50％でしかなく（Henriksson ら, 1993他），わが国でも飛鳥井（1994）の22.9％との報告がなされている．したがって，自殺者の30～80％は，精神疾患に罹患しながらも精神科的な治療を全く受けていないことになる．これらの精神科非受診群をどのように精神科治療にのせていくかが，自殺予防の観点から重要である．しかしながら，これら